

日本声楽発声学会

学会通信 第46号特別号

2021年10月発行

会員の皆さまへ

会長 川上 勝功

未だに終息の見えないコロナ禍に、社会全体が大きな不安を抱えたままズルズルと引き摺られて行く日々に、何も抵抗することの出来ない自分に対して、そろそろ我慢の限界を感じて生きているのは私だけではないように思うのですが、皆さまはどうお過ごしでしょうか……？

マスコミ等ではいろいろな情報が流れて来ますが、ある医学関係の専門家の話では、まだ4~5年の間は、ウィズコロナの時代は続くでしょうとのこと。気の遠くなるような話に唾然呆然の極みと感じています。

前置きはさておき、ここに『学会通信第46号』をお届けいたします。今回は“特別号”と銘打ちまして、学会の先達たちの功績を称える情報を特集いたしました。

まず第1番目に、“91歳”の川村英司先生と“88歳”の小林道夫先生のドイツ歌曲リサイタルです。第2番目は、永井和子先生のYouTubeで公開された演奏会です。女性の年齢を明かすのは大変失礼かと思いましたが、演奏が素晴らしかったので、やはり本当のお歳をお伝えした方が宜しいかと考えまして、敢えて申し上げます。”御歳84歳“でいらっしやいます。

第3番目には、先の川村先生、永井先生共々、学会の重鎮としてお働き下さいました、山田実先生(89歳)の『ICVT(国際声楽指導者会議)の歴史』です。私、川上(筆者)も何度か参加させて頂きましたが、今回は第1回の開催から最新の情報までを纏めて報告して頂きました。

そして最後には、学会現役理事の竹田数章先生と田中昌司先生の出版されたご本を3冊ご紹介させていただきました。

学会の執行部におきましては、理事の先生方及び事務局にお手伝いいただきまして『声楽発声用語集』の作成、そして、永井和子先生がお一人で纏めて下さった、米山理事長時代の『教育部門研修会』の冊子化を進めるべく努力いたしております。

そして、学会にとりまして大切な『会員名簿』の作成を事務局を中心にして手掛けております。

それからもうひとつ、東京圏に住み、一番お若くてフットワークの軽い森井理事に事務局次長をお願いいたしました。齊藤事務局長の補佐役として、もう既に実働していただいております。

先日、皆さまに配信させていただきました、オンライン講座の次の配信の準備も進めて行こうと考えております。

尚、第46号に掲載を予定しておりました「なぜ日本の声楽発声教育は遅れてしまったか」(明治初期からの歴史を探る)は、都合によりまして次号以降に回すこととなりました。突然の計画変更になりましたこと深くお詫び申し上げます。悪しからずお許し下さい。

台風シーズンもやって参りました。東海地震も心配を増して参りました。それに加えてコロナ禍！！

皆さまにおかれましては、呉々も健康に留意され、お元気で過ごされますことを、心からお祈りいたします。

「ICVTの歴史」

本学会顧問 山田 実

声楽家

桜美林大学名誉教授

コロンビア大学大学院学芸博士

ICVTは、全世界声楽指導者学会として1987年発足以来、現在世界40カ国以上が参加、会員数も約一万人に登る。各国の声楽学会の共進牽引と橋渡しとしての活動を通して、声楽指導者同士の絆も築いてきた。発足当初のメンバーであった日本は参加主要国としての地位を確保してきたが、筆者が体調不良で参加できなかった2回の大会で参加者が激減してしまい、また、ICVTについて詳しくご存知ない会員も増えつつあることから、今回成り立ちや経緯を学会員に広くお伝えしたい。

International Congress of Voice Teachers (ICVT)～国際声楽指導者会議～は、National Association of Voice Teachers (NATS)～全米声楽指導者協会～が、世界規模の声楽国際学会設立を提案し、アメリカ、ドイツ、フランス、日本から代表者を招集し創設に至った。

第1回は1987年7月、フランス、ストラスブールで開催されるが、そのほぼ3年前、NATSのマーヴィン・ケンジー氏を会長とし、ドイツからホルスト・ギュンター氏、フランスからエディット・セーリック氏、そして3氏と交流のあった山田がアジア総括として日本代表を務める様に要請を受け、4人による準備委員会が発足した。

プログラミングは、個人の研究発表を公募し、同年9月からメトロポリタンと契約されていたトーマス・ハンブソン氏にリサイタルを、イタリアから栗林義信氏が師事していたカンポガリアーニ氏、スウェーデンから著名なテノール歌手、ニコライ・ゲ

ッダ氏に公開レッスン(Master Class)を要請。その後ゲッダ氏から体調不良で不参加の申し入れがあり、急遽山田が当時ウィーンに在留されていた川村英司氏にドイツリートのマスタークラスの担当を依頼、快諾を得た。

日本人参加者は日本から山田を含む渡航者3名、それにスウェーデンに留学されていた大谷研二氏ご夫妻、そしてウィーンからの川村英司氏の計6名のみであり、全体として35カ国から650人の参加を見た。

参加国代表の協議の結果、以降、4年に1度の開催となり、第2回はアメリカ・フィラデルフィア。そして経費のかかり過ぎる同時通訳を止め、講座は全て英語で行う事とした。同時通訳は15分以上連続出来ず、英独仏伊の各語最低2名、計8名を必要とした為である。

1991年、第2回の米国フィラデルフィアでは、オランダからエリー・アメリック氏にマスタークラスを依頼。山田はリチャード・ミラー氏の公開レッスンの司会、また、エディット・セーリック氏のフランス歌曲で仏・日本語の、原口雄二氏のドイツリートのマスタークラスで日・英語の通訳を務めた。

ミラー氏とはその後も度々公開レッスンの助手を依頼され、世界から信望者の多いミラー・メソッドを学ぶ機会に恵まれた。ミラー氏は当時オハイオ州のオバリン・コンサヴァトリーで教鞭を取られており、一時、各地のオーディション合格者はオバリン出身者がジュリアード卒業生を上回った時代があった。同氏によるStructure of Singingは、日本語に翻訳され、(歌唱の仕組み)音楽之友社から出版されている。

日本からは15名ほどが参加。テス旅行社に往復の航空券、滞在中のホテル、それに帰路、ニューヨーク観光などを設定して貰い、以降、参加者の親睦を兼ね、会議終了

後の観光が常設される。通訳はケンジー氏を通して現地在留の商社マンを依頼したが、声楽の専門用語など、かなり山田が補わねばならなかった。

その後、各国代表が協議して3年毎の開催とし、次期候補としてオーストラリアとニュージーランドが立候補。投票の結果、ニュージーランドのオークランド開催に決定し、以降、研究発表、演奏、公開レッスンを含め、全て開催地の責任で決定する事とし、ICVTの本格的な活動が開始する。

1994年、ニュージーランド・オークランドの第3回には日本からの参加者も20名余となり、通訳として東大音声研から小林範子氏を、渡航費、滞在費、それに謝礼20万円を参加者負担で依頼出来た。山田の高校同級生だった日本旅行社長に直接依頼し、航空券、宿泊などをなるべく参加者の負担を削減すべく、無理を言って面倒を見て貰った。

オークランド滞在中は連日悪天候で風雨が強く、日本から持参した折り畳み傘はすぐ壊れた。現地の人たちはゴルフ場で使う日傘を使用していた。

終了後、日本旅行に依頼してシドニー観光を設定。ニュージーランドでは悪天候で見られなかった南十字星は、期待が大きかった分、意外に小さいのに失望。シドニーの7月は音楽の冬季シーズン中、貝殻の形で有名なオペラハウスで、長大過ぎて日本では第2部のみ演奏会形式でしか演奏されなかったベルリオーズの“トロイアの人々”を鑑賞。コアラ動物園などを訪問。

その後、NATSがそれまで1年半間隔で7月に北方の州で、12月に南方の州で開催していたコンフェレンスを、12月がクリスマスと新年の間で参加者も少ないので、2年に1度、7月開催に改めた為、ICVTが3年間隔だと、NATSの4年間隔が同年開催になるのを避けて、再び4年間隔となる。

第4回は1997年、英国ロンドンで開催され、通訳として前回の小林範子氏に同行して戴く。日本からは丹羽勝海教授が日本大学芸術学部の講師、生徒を同行され、日本の現代音楽モデルとして、吉松隆氏のネオオペラ“セレスタ”を主演、演出された。

王立歌劇場などで、世界一流のオペラが上演される一方、ミュージカルでも大きな成果を上げるロンドンでは、クラシック以外の声も大きく取り上げられた。

朝のセッションの前には、楽器の為のウォーミング・アップとして話題のトレーニングを、解説を聞きながら毎日体験受講。また、NATSで親しく交流させて頂いていたハワード女史の公開レッスンは、ヴィオレッタから、ミュージカル、カントリー、ポップス、シャンソン等、文字通り七色の声を操り、様々な声のスタイルに即した歌唱法、訓練法、舞台での振る舞い方など指導をされた。経験、知識、技術、世界には凄い教師がいると舌を巻く。国際学会の醍醐味でもあった。

山田は、スンドベルジュ氏が提唱された *singers formant* を得るための気管と梨状陥凹との比率 1:6 を取得するための喉頭調節による音色の変化を、東大音声研で撮影した喉頭の超音波撮影を用いて発表。また各国語が保有する倍音～バス・バンド～の研究で著名なトマティス博士の講演時、依頼を受けて66歳のテノールを披露した。

親睦会では、歌いたがりの声楽家の集まりであるから、様々な言語での歌唱を代わる代わる披露。山田は持参した法被を羽織り、松島音頭を披露。手拍子と掛け声で大変盛り上がった。言葉は違っても音楽で結ばれた仲間同士であることを、皆で楽しむ事が出来た。歌は人と人を温かく結んでくれる。

終了後、参加希望者でパリ、ウィーンを

訪問する。

2001年、第5回のフィンランド・ヘルシンキには主催国フィンランド、米国に次ぎドイツを抜いて日本から26名が参加。ヘルシンキ国立歌劇場が会場。通訳はシベリウス音楽院に留学、館野泉氏に師事されていた本学会名誉会員、飯田忠文氏の姪御さんで、現昭和音大准教授 飯田佐恵さんに依頼。通訳の旅費、滞在費が節約出来た。

フィンランド学会の規模はコンパクトではあるが、非常にスマートに開催を成し遂げた。理事の大多数が女性であり、開催セレモニーも洗練され、学会の力量が伺えた。セッション前の参加登録も、山田が全員の登録を先に済ませるが、外注の運営請負会社のスタッフが行き届いていて万事スムーズだった。

ゲストは、ビルギット・ニルソン氏。過去の大会も参加されたスンドベルジュ氏の講座は、やはり大人気であった。

川上会長、JARS会員が、日本歌曲紹介と演奏を行ったが、複数セッションが同時進行されるため、国立歌劇場から移動し、シベリウス音楽院で行われ、わざわざ、ヘルシンキ大会会長が、聴講に来られ、セッションの成功に大変満足されていた。

山田は武蔵野音大紀要で名歌手4人の音響分析について発表した子音のポジションの研究発表を行った。ジュリアード音楽院のマーシャル教授による発語研究に加え、アメリカン・オペラ・センターのイタリア公演において、G. C. メノッティ氏の“Unicorno, Gorgono, Manticorno”上演に際し、同氏から直接個人指導を受け、イタリア語の/r/は、母音間は弾音(フリップ)、子音の前後と語頭、語尾は顫動音(ロール)にすることや、2音間のピッチが異なった摩擦音、側音、通鼻音は、次音が母音の時は低い方のピッチ、子音の時は前音のピッチとすると、発語が容易で聴き取り易くなる事などを発表した。

また、1974年に日本福音ルーテル教会から出版されていた教会賛美歌中の山田の作曲が、ルター派を国教とするフィンランドで母語に翻訳、出版されていたものを、作曲者自演としてフィンランド語で昼休み中に歌唱披露した。

正式なディナー以外にも、気楽な集まりが何回か開催される。日本の参加者も歌を披露され、大いに喜ばれ、各国参加者と親しみを深めた。

帰路、ロシア・サンクト・ペテルブルクを訪問。エルミターージュ美術館、ロシア国立バレエ鑑賞など、素晴らしい経験をした。エルミターージュ美術館は、丁度日曜日に当たり、入り口は300人余り長蛇の列！ところが日本旅行から依頼した、モスクワで日本語を勉強しているガイドさんの機転で、なんと出口から待ち時間0で入場！この世の贅沢を集めた様な豪華な調度の数々に感嘆する一方、展示準備中なのか、カンディンスキーの絵画が廊下の陰に無造作に置いてあるなど、不思議な体験を皆で堪能した。日本旅行社指定のホテルは超豪華で、朝食からキャビア、ローストビーフ、シェフが目の前で調理してくれたものを食べ放題など、参加者全員超満足！どんな時でも食べ物は大切？



写真:ヘルシンキ大会の帰路 サンクトペテルブルク観光

2005年、第6回は7月でも肌寒いカナダ・ヴァンクーヴァー。通訳は英語圏とあってNATSで知り合ったアメリカ在住の2世の方に依頼。前回同様、旅費、滞在費が節約出来た。山田は”変声期前後の発声指導”シンポジウムに招聘され、シンポジスト唯一の男性として意見を述べた。



写真：シンポジウムの様子

毎回実施されるコンサートも楽しみの一つであるが、初めて聞く曲など、情報收拾にも大いに役立つ。出版社が臨時店舗を出店し、日本ではまだ入手できない新譜や、曲集、書籍等を昼休みに物色。

お楽しみの学会後のツアーではカナディアン・ロッキーの雪渓地帯の雄大さに圧倒された。毎回大会に参加されるメンバーも多く、旅は道づれ、旧交を温めた。

2009年、第7回はフランス・パリ。新宿歌舞伎町並みの盛り場のバーレスク劇場。近隣に適当なホテルがなく、満員の地下鉄で連日2駅の移動。昼食も会場に準備がなく、近隣の食堂は昼休み時にすぐ満席！午前の最後か午後の最初のセッションを欠席しなければならない始末。

運営も超お粗末で、参加費用をまとめてお世話していた山田のクレジットから、ダブって引き落とされたが、交渉すれどもほとんど戻らず、日本からの出席をセッション前に取り消した2人分の参加費は、帰国後、一年に渡って、再三の催促にも関わらず、大赤字で返金なし。時差がある為、帰

国後、連日の交渉は真夜中となり、目に隈を作って奮闘したが、のれんに腕押し。現地でお願ひした通訳も、無断遅刻、無断早退の連続。これがフランス風？米山先生のご紹介で英語の通訳の筈が、フランス語しか分からないと言われ、それなら頼まなかったが、山田の負担が増えるのみ。謝礼は20万円しっかり受け取られた。

7月4日のパリ祭と重なっていたせいか、現地の参加者が見込みを下回り、パリ市からの援助も当初の見込み違いから大赤字！返金にも応じられず、運用に掛かった経費精算にも苦慮する事態。流石にNATSのみの赤字負担では不可能となり、参加国の会員数に応じた補填の要請が各国学会にあり、日本からも6万円ほど処出を余儀なくされた異例尽くめの事態となった。

次の開催国ブリスベンでの代表者会議でも、フランスの学会の不手際を、各国から猛烈抗議があった由。長い歴史の中で、唯一の失敗開催となった。

終了後は、日本旅行に依頼してハンガリーのブダペスト、チェコのプラハを歴訪。ドナウ川のナイト・クルーズなど、こちらは参加者全員非常に楽しんだ。

2013年の第8回はオーストラリア・ブリスベンで開催。参加希望者の登録、航空機、ホテルの手配など、全ての手続き終了後の4月に、山田が間質性肺炎を発症。80日の入院を余儀無くされ、家内と2人キャンセル。団体旅行の最小催行人数10名を1人下回ったにも関わらず、病室から交渉し日本旅行が増額無しで催行。通訳は運営委員の紹介で現地の日本人留学生お二人にお願い。代表者会議には、森井佳子氏と、長年ご参加下さっている望月和子氏にご出席頂き、大任を果たして頂いた。また片山歩氏も沢山のご尽力を下された。山田は、日本からリモートでの参加となったが、退院翌々日に、発声学会創設者 柴田陸先生

門下のコンサートが東京文化会館小ホールで開催され出演、林 康子氏、豊田喜代美氏ら、多くの門下生と旧交を温める事も出来た。その後は、参加者のサポートに邁進した。能楽の発表を生駒里翠氏が行う筈であったが体調不良で発表者が現地不参加の為、山田が原稿の査読をし、音声資料を整えて、英語に翻訳した。現地では日本からの参加者皆さんが強力なサポートを下さり、無事に日本の伝統芸能能楽をご紹介出来た。ニスベット会長のお人柄にも助けられ、山田不在の日本の参加者に細やかな配慮をお願いできた。

第9回、2017年、スウェーデン・ストックホルムは、山田が体調調整中のため森井佳子氏が日本代表代理として唯一の参加となった。2018年3月発行の声楽発声研究第9号に参加報告がされている。

第10回は2021年、オーストリア・ウィーン開催の予定であったが、COVID19の影響で2022年に延期された。

「会議の組織委員会と多くの協力者は10ICVTを、音楽の都ウィーンで開催するために多大な努力をして来ましたが、オーストリアの衛生状態も決して悪くないのですが、来年までに現在の世界的危機が収まるとは考えられません。そこで役員会の慎重な討議の結果、2021年から2022年8月3日～6日に延期する決定を致しました。

健康に留意し、歌い続けて☺
晴天のオーストリアから
マルチン・ヴァッハ」

ICVT会長のマーヴィン・ケンジー教授と、米国発声学会のアレン・ヘンダーソン会長から、次の様な励ましのメッセージがヴァッハ会長に届いています。

「現在、私達は全世界、難しい時局に直面しています。それは日々の生活には元より、演奏や指導の面にも大きな影響をもた

らしました。私達はそれを受け入れ、活力を持って対抗しつつあります。ICVTも1987年、ストラスブールで発足以来、初めて影響を受けました。

私達はオーストリア発声学会と10ICVTを2022年に移行する準備に携わった皆様に深く感謝します。ヴァッハ会長はすでに新しい計画に着手しておられ、私達はそれに携わる皆様の知識と献身を全面的にお支えします。

マーヴィン・ケンジー ICVT会長
アレン・ヘンダーソン NATS会長
ICVT副会長」

また長年友人として親しく接して戴き、そのお人柄でJARSにファンも多いICVT会長ケンジー教授から当学会宛に次のようなメッセージが届いている。

Dear JARS members and friends,
The 10th ICVT Congress is now planned for August 3rd-6th, 2022 in Vienna, Austria hosted by the EVTA-Austria Association. The Chairman is Professor Doctor Martin Vacha and he will be pleased with the JARS interest and support. For information you should write to www.icvt2022.com
The theme is *FOR THE SAKE OF MUSIC* and the Call for Papers ends this month (August).

Since the first Congress in 1987, JARS has been active and made valuable contributions to our Congresses.

Sincerely,
Marvin Keenze
ICVT Chairman

NATS International Coordinator
日本声楽発声学会会員の皆様へ
2021年7月29日

第10回国際声楽指導者会議が2022年8月3日から6日まで、オーストリア、ウィーン

でヨーロッパ・ウィーン支部発声学会主催、マルチン・ヴァッハ博士によって開催され、日本声楽発声学会の皆様の興味と支持をお願いします。詳細については www.icvt2022.com をご参照下さい。テーマは「音楽のために」となっており、研究発表の締め切りは本年8月末です。1987年の第1回から日本声楽発声学会は精力的に関わり、貢献してきました。今後も是非よろしくお願ひします。

マーヴィン・ケンジー
国際声楽指導者会議会長
米国声楽指導者連盟国際部長

2022年第10回ウィーン大会は、『音楽のために』を主題とし、トーマス・ハンプソン氏が主題講演を受け持つ。大会ヴァッハ会長から、このテーマについてのメッセージは以下の通りである。

「歌唱には、教育的、健康的、芸術的など、多くの視点があり、文化の多様性と社会的機能を有すると考えられますがICVT2021では歌唱のみに限定したいと考えています。

私達はこの芸術的表現のための尊敬と情熱を示したく思います。『音楽のために』のテーマはこの考えを高揚し、全ての計画、実行、評価の原点となるでしょう。

音楽の都ウィーンは長年に渡り卓越した音楽家、作曲家、演奏家を輩出して来た由緒ある場所です。それゆえICVTの役員会は全会一致でオーストリア発声学会にウィーンに於ける10ICVTの運営を任せました。

会議の全ての案内、特に論文の発表については www.icvt2021.com を全体について <https://www.facebook.com/ICVT2021/> をご覧ください。

ご質問がありましたらご遠慮なくお尋ね下さい。2022年夏、ウィーンで皆様にお目にかかるのを楽しみにしております」

www.ICVT2021.com は随時新しいニュースを掲載予定、Facebook、Twitter、

Instagram等 social media channels でも情報を入手可能である。ウィーン大会の進捗状況だが、大会ヴァッハ会長より、8月末までに、論文発表の締め切りをすると連絡が来ているが、COVID19がどのような状況になるのか、先行き不透明で、全く予断を許さない。ワクチン接種が進み、ウィーンは粛々と準備を進めつつあるが、まずは状況を慎重に見定めなくてはならない。

社会が変容を求め中、ICVTの新たな発展の方向性を模索すべく、また参加者への身体的、経済的、時間的負担を削減するため、ヴァッハ会長にリモート開催も並行して行う様提言したが、4つのセッションを同時に配信する準備など、今大会では対応しきれず断念とのことであった。今後、裾野を広げ、多くの声楽指導者や学生にも貢献する国際学会である為、時代に則した大会の在り方の議論は、引き続き闊達にしていきたい。いずれ日本を開催国にとJARSに期待を寄せられている。

ヴァッハ会長より、「いま私たちは、生の音楽に飢えており、参加者皆さんとの直接交流を楽しみにしている」とのメッセージを戴いている。

世界を巻き込んだパンデミックとなり、我々も、長年の友であり、学会に多大なご尽力を戴いた末芳枝前々会長を失う悲しみを経験した。非常事態が1日も早く収束し、音楽で社会貢献できる日常、国際間の絆を深める交流が出来る日を、切望してやまない。その時には、日本からも一人でも多くの参加が叶うことを祈りたい。

学会員皆さんと大切なご家族のご健康、1日も早く穏やかな日常が戻ることを願いつつ、学会例会で、笑顔でお目にかかる日を心待ちにしている。

■名誉会員・役員の活動

名誉会員

「川村英司先生の卒寿演奏会」

2021年4月23日、東京豊洲シビックセンターホールにて、川村先生の“卒寿”の記念コンサートが開催されました。コロナ禍で約1年の延期を余儀なくされた、待ちに待った演奏会でした。ピアノは長年のお付き合いのある小林道夫氏。シューベルト、シューマン、ブラームス、ヴォルフの作品を所々曲間にお話しを交えながら、格調高い演奏をご披露なさいました。

会場では学会の方にもお目にかかることが出来ました。素晴らしい演奏会を拝聴できた喜びが、マスク越しではありましたが伝わって参りました。

演奏会評は、『選択』、『音楽の友』、『毎日新聞』に掲載されており、プログラムと一緒にコピーいたしましたので、ご覧いただきたいと思います。但し、大変残念ながら『選択』に掲載の記事はコピー厳禁でお届けできません。お読みになりたい方は、『選択』2021年5月号をご購入願います。書店ではお求めになれませんので、直接『選択』出版部【0120-374-639】にお申し込みいただきますようお願いいたします。

尚、演奏会の録画配信はもう暫くお待ち願います。(同封の資料をご参照ください。)

川上 勝功

実施している事業の一環として、新型コロナウイルスにより、疲弊した芸術家のため
に元気を！との企画を立ち上げ、芸術文化
の分野で多大な功績をあげられた、兵庫県
ゆかりのアーティストの方々の動画を
YouTube で公開しております。

その中のお一人に学会の顧問でいらっ
しゃいます永井和子先生がご出演されて
おり、数々の演奏、インタビューが、『研
究ノート』～歌声と向き合って～ と題し
まして16分程にまとめられて配信されて
おります。

「つながろうアート！永井和子」と検
索していただきますと、YouTube でご覧
になれます。公開期間の制限は設けてお
りません。

どうぞ皆さまお楽しみにご覧いただき
ますようご案内いたします。

川上 勝功

顧問

「永井和子先生の動画作品」が
YouTube で配信中です！

公益財団法人「兵庫県芸術文化協会」が

■新刊紹介

1. 「イラストで知る 発声ビジュアルガイド」 セオドア・ダイモン 著／竹田数章 監訳／篠原玲子 訳

声はどのようにして音になるのか——その発声のメカニズムを優しく説明したビジュアルガイド。声を取り巻く複雑な骨や筋肉の構造からその働きまで、オールカラーのリアルなイラストや略図を使ってシンプルに解説。歌手、俳優、声優だけでなく、声を使う全ての人に役立つ本です。著者のダイモンは、心と身体を研究する気鋭の理論家。監訳は本学会理事で、『ヴォイス・ケア・ブック』監訳者でもある仙川耳鼻咽喉科院長、桐朋学園大学音楽学部・洗足学園音楽大学 音声生理学講師の竹田数章氏【定価】2,750 円（本体2,500 円）

【ISBN】9784276142657 音楽之友社

https://www.ongakunotomo.co.jp/catalog/detail_sp.php?code=142650


2. 「音大生・音楽家のための脳科学入門講義」 田中昌司 著

音大生・音楽家の方々向けに、わかりやすい脳科学の入門書として本書を執筆しました。脳科学の基礎事項からはじめ、音楽と脳の関係についても解説しています。第109回(2019年)の特別講演でお話しさせていただいた内容も多数含まれています。ぜひご覧ください。著者は本学会理事で、上智大学教授の田中昌司氏【定価】1,980 円（本体1,800 円）【ISBN】9784339078251 コロナ社

<https://www.coronasha.co.jp/np/isbn/9784339078251/>

新刊・関連書籍のご案内


2021年3月刊行



音大生・音楽家のための
脳科学入門講義

田中昌司 著/A5判/126頁/定価1,980円

音楽家を対象に研究・講演会などを行ってきた脳科学者が、脳のことをもっと知りたいと考える音大生・音楽家に対し、講義形式でわかりやすく解説した脳科学の入門書。脳科学の基礎事項から始め、音楽との関係について解説する。




音響サイエンスシリーズ

日本音響学会 編/各巻A5判/既刊21点

4. 音楽はなぜ心に響くのか
—音楽音響学と音楽を解き明かす諸科学—
山田真司・西口磯春 編著/232頁/定価3,520円


6. コンサートホールの科学
—形と音のハーモニー—
上野佳奈子 編著/214頁/定価3,190円



株式会社 **コロナ社**

科学技術と共に歩む

〒112-0011 東京都文京区千石4-46-10
TEL (03)3941-3131 (代), -3132, -3133 (営業部直通)
<https://www.coronasha.co.jp> FAX (03)3941-3137
E-mail eiogyo@coronasha.co.jp



■2020～2021 年度学会活動報告

■理事会開催記録

●2020（令和2）年度第1回理事会議

1. 招集形態：メールによるオンライン
2. 開催日時：令和2年7月12日（日）
13時30分～、令和2年7月13日（月）
22時30分～
3. 出席理事名（順不同・敬称略・委任有）
川上、佐々木、豊田、池田、河合、小森、
齊藤、三枝、菅、鈴木、竹田、田中、
西浦、森井、佐々木 徹（事務局）

●2020（令和2）年度第2回理事会議

1. Web 会議システムによるオンライン
2. 2020（令和2）年9月13日（日）
13時00分～14時45分
3. 川上、豊田、佐々木、池田、河合、
齊藤、竹田、田中、西浦、森井
欠席：小森、三枝、菅、鈴木
佐々木徹（事務局）

●2020（令和2）年度第3回理事会議

1. Web 会議システムによるオンライン
2. 2020（令和2）年11月1日（日）
13時30分～15時00分
3. 川上、豊田、佐々木、池田、河合、
小森、齊藤、三枝、鈴木、竹田、田中、
西浦、森井 欠席：菅
佐々木徹（事務局）

●2020（令和2）年度第4回理事会議

1. Web 会議システムによるオンライン
2. 2020（令和2）年12月20日（日）
12時30分～14時30分
3. 川上、豊田、佐々木、池田、河合、
小森、齊藤、三枝、菅、鈴木、竹田、
田中、西浦、森井、佐々木徹（事務局）

●2020（令和2）年度第5回理事会議

1. メールによる持ち回り会議
2. 2021年（令和3年）2月3日（水）
回答締切日
3. 川上、佐々木、齊藤、竹田、池田、
河合、小森、三枝、鈴木、田中、豊田、
森井 欠席：菅、西浦
佐々木 徹（事務局）

●2020（令和2）年度第6回理事会議

1. メールによる持ち回り会議
2. 2021年（令和3年）3月9日（火）
回答締切日
3. 川上、佐々木、齊藤、竹田、池田、
河合、小森、三枝、菅、鈴木、田中、
豊田、西浦、森井、佐々木 徹（事務局）

●2020（令和2）年度第7回理事会議

1. メールによる持ち回り会議
2. 2021年（令和3年）3月16日（火）
回答締切日
3. 川上、佐々木、齊藤、竹田、池田、
河合、小森、三枝、菅、鈴木、田中、
豊田、西浦、森井、佐々木 徹（事務局）

●2020（令和2）年度第8回理事会議

1. Web 会議システムによるオンライン
2. 2021（令和3）年5月24日（月）
19時00分～21時00分
3. 川上、齊藤、佐々木、池田、河合、菅
鈴木、竹田、西浦、森井、欠席：小森、
三枝、田中、豊田（意見書提出）
佐々木徹（事務局）

●2021（令和3）年度第1回理事会議

1. Web 会議システムによるオンライン
2. 2021（令和3）年8月14日（土）
19時00分～21時10分
3. 川上、齊藤、佐々木、池田、河合、
三枝、田中、竹田、西浦、森井
欠席：小森、菅、鈴木、豊田

佐々木 徹 (事務局)

●2021 (令和 3) 年度第 2 回理事会議

1. Web 会議システムによるオンライン
2. 2021 (令和 3) 年 9 月 25 日 (土)
19 時 00 分～21 時 00 分
3. 川上、齊藤、佐々木、池田、河合、三枝、
菅、鈴木、竹田、田中、西浦、森井
欠席：小森、豊田

佐々木徹 (事務局)

■第 57 回総会 書面総会開催記録

審議期間：2021 年 6 月 7 日～18 日

書面議決結果報告：同年 6 月 26 日

■2021 年度夏季研修会 (ネット配信)

- ・三枝理事「ヒトの歌唱の原型とは何か？」
- ・齊藤理事「柔軟な構え」に基づく声楽発声訓練方法～学習者が自立可能な声楽発声を目指して～

(講演動画の配信：9 月 1 日～11 月 30 日まで URL よりパスワード入力で視聴可。質疑応答は同封資料をご参照ください。)

編集後記

学会通信第 46 号特別号をお届けします。本号は「国際声楽指導者会議の歴史」につきまして顧問・山田実先生の国際的活動のご報告を主軸に特別号として編集いたしました。これは執行部はじめ理事会の念願の企画で、やっと実現にこぎ着けたという気持ちでいっぱいです。当初コロナ禍でのリモート会議は、様々な障害がありましたが、執行部・事務局と理事会の協力のもと、粘り強く協議を重ねてまいりました。2021 年 7 月～9 月に東京オリンピック・パラリンピックが開催され、予想通り感染拡大は予断を許さぬ体を見せています。

そのような状況下の 9 月に、学会事務局

からネットによる情報配信が可能になり、会員の皆様には講演や研究発表をご視聴いただけるようになりました。

今後も活動を絶やさずに、これまでのペースを守りながら講演・研究等の発信を続けることが計画されております。是非とも皆様の力強いご参加ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

会員の皆様方の益々のご清祥とご発展を祈念申し上げますとともに、学会の益々の発展に向けて皆様のご協力を賜りますよう何卒よろしくようお願い申し上げます。

編集担当：齊藤 祐、森井 佳子

日本声楽発声学会

会 長 : 川上 勝功
副会長 : 佐々木 正利
副会長・事務局長 : 齊藤 祐
事務局次長 : 森井 佳子
(エグゼクティブ・アドバイザー): 竹田 数章
理事 (五十音順)

池田 京子 河合 孝夫 小森 輝彦
三枝 英人 菅 英三子 鈴木 慎一郎
田中 昌司 豊田 喜代美 西浦 美佐子

日本声楽発声学会事務局 佐々木 徹

e-mail: info@jars-voice.org

Tel/Fax: 03-6804-0626

〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4

振替口座 : 00170-0-119920

日本声楽発声学会 HP

<http://www.jars-voice.org/>

学会通信第 46 号特別号

2021 年 (令和 3 年) 10 月 10 日発行

発行者 : 日本声楽発声学会

編集者 : 齊藤 祐、森井 佳子